

「賜物を生かす」

2025年10月

中山 昇(1925~2019)

あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神の様々な恵みの良い管理者としてその賜物を生かして互いに仕えなさい。
(ペトロの手紙 一 4章10節)

1966年(昭和41)文部省は中央教育審議会の答申を受けて、「期待される人間像」を発表しました。戦後教育の歪みが俎上にのぼって、民主主義のはき違えという話題が教育界を賑わせました。中でも、道徳教育をしっかりとやらなければ日本の将来が危ないといわれました。公立の学校ではこれをどう現場で受け止め、実質化するかが盛んに討議されました。ポイントは二つあったと思います。第一は思想的に国家主義の復活につながらないかということで、第二は徳目主義では本当の道徳は身につかないということでした。

その発表を契機にキリスト教学校でも関心が高まり、従前から話題であったキリスト教人間像ということが盛んに取り上げられました。道徳は宗教の裏付けなくして身につくものではないという主張です。

清教学園もこの問いかけを受けて、では清教学園はどんな人間を育てるか、真剣に討議を重ねました。思索は自然と聖書の中のキーワードに集約されてゆきました。

「創造の神、キリスト、聖霊、律法、罪、十字架、復活、悔い改め、救い、福音、

真理、自由、平和、信仰、希望、愛」

などです。そして、これらを凝縮するものとして到り着いたのが「清教学園のめざす人間像」でした。いつまでも存続する「信仰と希望と愛」を踏まえた三つの目標で、今でも各教室の黒板の上に掲げているものです。

清教学園のめざす人間像

- 一、 神を信じ、誠実に仕える
- 一、 真理を学び、賜物を生かす
- 一、 隣人と共に、平和を築く

文部省の「期待される人間像」等とはとっくの昔に忘れ去られて、話題にもなりません。清教学園ではその時々神様の投げ掛けてくださった楔として、大切に心に刻みこんで守っているのです。真理は時代の変化にも揺るがぬものであります。当時の思いを書き留めておきます。

神を信じ、誠実に仕える

どうして道徳が宙に浮いてしまうのでしょうか。苦勞して真面目に生きている者が貧乏籤を引いて、悪知恵の働く者は得をする世の中では、道徳は権力の側が都合よく内側を治める道具にする
と見抜いているから、眉唾物として扱うのです。だけど、信がなければ世界は闇です。信頼をなくしては、政治も経済も文化も成り立ちません。まして教育など及びも尽きません。信を立てるのが道徳です。だのにどうして戸惑いがあるのでしょうか。信頼の根拠を人間に置くからだというのが私たちの到達点です。人間一人ひとりはそのように立派でも確かな者でもありません。ちょっとした弾みでも転ぶのです。裏切るのです。信頼の保証は、神様に対して誠実に生きる姿勢のなかで育まれます。神様が審判者であると信じている者は人に対しても慎み深く生きます。たとえ躓いても、また躓かせても、もう一度誠実にたちかえる道が残されているのです。だから神様を信ずることが人間らしく生きることの基本です。

真理を学び、賜物を生かす

神様が全世界を造られた出発点で、この世界を治める原理原則をおすえになったと信じて、それを人々は真理と名づけました。真理は私たちを自由にしてくださいというのがイエスキリストの約束です。私たちには家庭や学校があり、職場や病院があり、国や世界があつて、そのなかで生かされる術や意味を問いながら、働き甲斐や幸福を求めています。あたえられた知性と感情と意志を総動員した探究で、少しずつ真理の扉を開いて頂きながら、そこに生きる道を見いだしてきました。その道程が人間にとっての解放であり自由であります。

与えられた諸々の条件を大切に活用して、自分の人生を意味あるものに仕上げることを「賜物を生かす」という標語で表しました。与えられた生徒は教師にとって神様から与かった賜物であります。同時に自分の教える能力も環境も、生かせば豊かに実る、神様からの賜物であります。生徒も教師も保護者も共に賜物を生かし合う人生であるとき、神様は御自分の自由のなかに包み込んで、生かされることの喜びを一人ひとりに与えてくださいます。勿論、私たちにとっての最大の賜物は聖霊による永遠の生命です。

隣人と共に、平和を築く

「天には栄光、地に平和」が聖書に歌われている天使の合唱です。戦争に敗れてどん底に落ち込んだ私たちにとって、多くの傷みを通して心に刻み込まれたのが、国と国、人と人の平和の尊さでした。日本国憲法が連合国の押しつけであるとか、戦争放棄の第九条は現実に合わないなどと、憲法論議が絶えず蒸し返されますが、日本が世界に出来ている最大の貢献は、平和憲法に縛

られた結果による復興の実証であり、再軍備に道を開いた場合に予想される不幸の歯止めであり
ます。この歯止めが苦しみながら生きる知恵を絞ることが戦後日本の使命です。

平和は心のともしびです。神様に仕える心から始まって、隣の人に仕える心の火を灯し合うこ
とです。この友情の輪を広げるところに、闇の世界を生き抜く希望があります。日毎の生活の中
で、各々自分の事だけでなく、相手を思いやることで潤う、心の豊かさを体得させて頂くこと
です。人と人、国と国の交わりを心から大切にすることで、生かされたことの喜びを共感できま
すように。

1970年(昭和45)正月、ようやく建ち上がった二号館(註:現在のB棟)を背景にして、「賜物を
生かす」と彫り込んだ版画を年賀状にして送りました。

(中山昇『神ともにいまして ― 清教学園における開拓精神の展開 ―』[1997年7月刊]より)



「与えられる施設のの一つ一つが神様の用意して下さる賜物である」

※法人事務局より

2026年、清教学園は創立75年を迎える。何を大切に思い、ひたすらに祈りを重ねて教育活動の
歩みを確かなものとしてきたのか。今回2025年10月の「今月の聖句」では、創立者の一人である
中山昇先生の文章を掲載し、そのことを覚えなおす試みとさせていただいた。「清教学園のめざす
人間像」によって表された思いは、「スクール・ポリシー」という形での現在表現を得た今もなお、
新たな具現化のあり方を問い、真摯に向き合い続ける清教学園の開拓精神を支えてくれている。